

近代からの離反 岐路に立つカント

—『判断力批判』§77の解読—

那 須 政 玄

はじめに

本論文は自然しかも機械論的自然ではなく有機的・目的的自然をカントが擁護することのうちに、カントが近代の枠組みを破ろうとする意志をもっていることを見ようとするものである。

前号（『現代密教』二十一号）で明らかにしたように、ユダヤ・キリスト教的自然観は、自然を敵とみなして、敵と戦うためには敵を知る必要があるとして、自然科学を発展させてきた。ユダヤ・キリスト教においては敵としての自然は人間と同じ神による被造物でありまた人間よりも劣る存在である。特に近代が合理的であるという理由で神を前景から後退させてしまっただけからは、人間はすべてのものの頂点に立ち、自然を支配しようとした。自然には自立性はなく、ただ素材の集まりであり、そうであるかぎり人間は自らの考えのままに自然を支配して構わない、と考えられた。

近代からの離反

近代におけるこのような自然の在り方は、十六・十七世紀の啓蒙思想を経て、カントになだれ込む。カントにおいて伝統的に継承される自然観と新たな考えのもとでの自然観（それは後にドイツロマン主義の自然観へとつながる）とが交錯する。ヨーロッパにおいても、ユダヤ・キリスト教的自然観とは異なるものとして、古代ギリシアの多神教的自然観があった。カントが近代の自然観を乗り越えて新たな自然観に目覚めたものには、モデルとしての古代ギリシアの自然観があったかどうかは不明である。しかし、カント以後のいわゆるドイツ観念論者例えばシェリング・ヘーゲルにおいては明らかに古代ギリシア的自然観の再考が促されていることは事実である。この論文においては、カントにおいてどのように自然観が変転するのかわかることを、『判断力批判』の最もスベクタクルなパラグラフである§77を考察することによってみていくことにする。

思想史の上でカントをどのように位置づけるかは難しい問題である。つまり、啓蒙主義的思想家の最後に位置させるのか、ドイツ観念論の先行者としてか。あるいは近代のただ中を生き抜いた思想家か、近代を後にした最初の思想家か、である。したがって表題の「近代からの離反」は、「近代の総括」でも「近代の克服」でも「近代からの後退」でも良いように思われる。いずれにせよカントは、自ら「近代像」を作り出し、そしてさらにその近代像を乗り越えようとした。まさにカントは近代と非近代の境界に立っていたことだけは間違いない事実である。哲学史からみると、カントは大陸合理論とイギリス経験論との否定的総合であるとみることができ。否定的であるのは、カントが両者の限界を見ているからであり、また総合的であるのは、カントは、少なくとも『純粹理性批判』と『実践理性批判』とに関しては、自ら合理論と経験論とに共通の場に立ちつつ両者を総合することによって自らの批判哲学を展開しているからである。

カントは教授就任論文『感性界と叡智界の形式と原理について』（一七七〇年）で、『純粹理性批判』につな

る新しい立場を表明した。しかしこの表明は、あくまでも表明であつて細部においてはまだ完全な形にはなっていない。その理由はいろいろあるが、感性界と叡智界の完全な分離は、カントをしてその結合に苦勞させたということである。したがつて、教授就任論文から十年かかつて（これをカントの沈黙の一〇年という）ようやく『純粹理性批判』が出版されたのである。しかし『純粹理性批判』で感性界と叡智界の（あるいは感性と悟性の）結合という課題は、結局カントの晩年まで続くこととなる。

カントの沈黙の一〇年は、手紙文で知ること以外にない。

「私は次のような表題をもつ著作を著すプランをもっています。すなわち、『感性と理性の限界について』である。感性は二つの部分からなるであろう。1. 現象学一般(Die Phänomologie überhaupt)。2. 形而上学、しかもその本性と方法に関して。理性も二つの部分からなるであろう。1. 感情、趣味そして感性的欲求の一般的原理。2. 道徳(Sittlichkeit)の第一根拠。私が理論的部門をその全範囲にわたつて、またすべての部門の相互的關係を考え抜くことによって、私は私にはまだなお本質的なことが欠けていたことに気がつきました。すなわち、その本質的なことは、私の長き形而上学的探求において、他の人々と同じように、私が考慮することのなく、また実際今まで隠れたままであつた形而上学の全秘密を解明するための鍵をなすものである。」

(カント、マルクス・ヘルツ宛の手紙 21.Febr.1772)

「形而上学の全秘密を解明するための鍵」は、結局、われわれ人間の悟性は、対象を生み出すことができるものではなく、したがつて感性を必要とする、というものである。感性界つまり現象界を基礎づける部門（感性の

限界づけ)は後に『純粹理性批判』となつて結実する。つまり、感性論と分析論(悟性論)とが現象界を基礎づけ、弁証論は、人間にとつての(あるいは現象界から見た)形而上学の実態を説明する。そして理性の限界づけは、「感情、趣味そして感性的欲求の一般的原理」として、後に『判断力批判』として説明される。さらに「道徳(Sittlichkeit)の第一根柢」は、『実践理性批判』として説明される。

このマルクス・ヘルツ宛の手紙に欠落しているのは、後に『判断力批判』の後半で語られる「自然の合目的性」である。

カントは自然、それも有機的自然を考えると今までの自らの自然観を変更せざるを得なかった。つまり『判断力批判』において自然の合目的性を語らんとする以前のカントは、自然を「対象」あるいは「客体」と考え、われわれの外にあり、われわれを触発するものと考えていた。そして対象は触発を通じてわれわれの感性に受容されるのであるから、感性も自然と考えて差し支えないとカントは考えた。したがって、『純粹理性批判』で行われる現象界の成立の基礎づけは、同時に自然、科学の基礎づけにもなっているのである。マルクス・ヘルツ宛の手紙で語られているように、現象学一般は現象界としての自然の基礎づけであり、「現象界以外の世界」は、理性論(理性の限界づけ)として弁証論、実践理性批判、判断力批判で語られる。このようなカントの根本姿勢は、『実践理性批判』の「結語」で以下のように語られている。

「繰り返し、じつと反省すればするほど常に新たにそして高まりくる感嘆と畏敬の念をもって心を満たすものが二つある。わが上なる星の輝く空とわが内なる道徳律とである。」(カント『実践理性批判』S288)

つまりカントは「わが上なる星の輝く空」をもって自然を、「わが内なる道德律」をもって人間を考え、前者を『純粹理性批判』で、後者を『実践理性批判』で考察した。

近代的自然観における自然は、人間にとっては「外なるもの」として与えられなければならない、したがってただ与えられ方（認識論的なあり方における自然）が問題なのであって、自然の意味（自然はわれわれにとってどのように存在しているのかという考察）は、まったく不問に付されているのである。この自然への関係の希薄さが人間を自らの内へと向かわせ、そこに道德律を見出し、それを行為の根柢に置こうとするのである。少なくとも人間の行為に関しては、つまり「人間は何を為すべきか」という問いに関しては、人間の内なる道德律（定言命法）に従うことになり、それが人間存在を支える唯一のものになるのである。

「わが上なる星の輝く空」としての自然と「わが内なる道德律」としての人間との分離が、この融合を目指すカントにとって生涯解けなかつた課題なのである。では、なぜ解けないのか。例えば、キリスト教中世においては自然も人間もともに神によって創造されたものであった。したがって両者を融合させる必要はもともとなかったのである。しかし、神を前景から退場させて人間を前景にもってきた近代的枠組みは、近代を生きつつも（人間を原基としつつも）人間の有限性を知ってしまった（自然的対象は与えられなければならないことを知ってしまった）カントにとっては、自然と人間との融合に腐心せざるを得なかつたのである。つまりカントは近代的枠組みを保持しつつ近代を乗り越えようとするのである。そのための道具立てが、「超越論的（先験的）あり方」「構想力」そして「判断力」といったものである。したがってこれらの道具立ては、近代的枠組みの補強のためと考えるならば近代的でもあり、またあり得ない想定としての「融合」を意図しているかぎりでは近代的ではないものでもある。

われわれ人間はどうやら経験できない、「三つ」のものに心を悩ませているようだ。それは神、人間そして世界（自然）である。それは天、人そして地でもある。神を現象界のことにように経験できないのはわかるし、人間の場合の「靈魂としての人間」も経験できないが、自然に関しては、なるほど個々の自然物は認識できるが世界と特定される「単なる広がり」としての自然は認識できるものではない。カントが指摘するように、これら三者は感性に与えられることがないのに、理性の推理能力によって考えてしまうものであり、否定しようにもいやがうえにもわれわれの想念を満たしてしまうものなのである。カントはこれら三つの理念は人間にとって運命的なものであると述べている。つまりギリシア悲劇に見られるように、回避しようとしても人間の力ではどうにもならずどこまでも追いかけてくるものなのである。

人間の歴史（少なくとも西ヨーロッパの歴史）は、神話から脱出して以来、これら三つの理念をそれぞれの時代の基盤として世界を形成してきた。つまり、古代ギリシアでは自然（フュシス）を、中世では神を、そして近代では人間を、基盤として。近代は人間を中心に置く時代であるのだが、その人間とは「日常的人間」であるのか、「靈魂的人間」であるのかあるいは「自然的人間」であるのかはつきりしない。カントは、定言命法を語り出せる「靈魂的人間」を基盤にしようとしたが、カントから百年後に現われたフロイトは性欲を土台とする「自然的人間」を基盤にしようとした。カントは「神的人間」を希求し、フロイトは「自然的（動物的）人間」を人間の真の在り方であると考えた。カントは動物から遠ざかるところに人間を見ようとするが、フロイトは神から遠ざかり動物に近づくとところに人間を見ようとする。

カントは神、靈魂、世界（自然）という三つの理念のうち、神と靈魂は『実践理性批判』によって救出できた

と考えた。それは、人間の行為の基盤としての定言命法を可能にするためには神と靈魂という理念の助けが必要であるとしたからである。神—人間—自然というヒエラルヒーにおいて、人間をより上位の神的なものとして位置づけようとするとき、人間は永遠性をもつ靈魂の人間として捉えられなければならないからである。

それでは世界（自然）という理念はいかにして救出されるのか。カントにとって、フロイトのように動物的な位置に人間を据えることは困難であるし辛いことであつたであろう。神—人間—自然というヒエラルヒーにおいて、人間を貶めるような自然への同化はそのままでは認められないことであつた。そこでカントは自然の捉え方をより幅広く柔軟なものにしようとする。つまり近代の中での自然は、因果関係の鎖に縛られ、自らは自立的に動くことはなく、単なる質料にすぎないものと考えられていた。そのような考えをカントは部分的に承認しつつもそれら以外にも別の自然の在り方があることを示そうとする。このカントの態度は、すでに見たように（マルクス・ヘルツ宛の手紙）、一七七〇年の教授就任論文さらにはおそらく『純粹理性批判』執筆の頃にはまだこのような恐ろしいことをカントは着想すらしていなかったのである。「恐ろしい」とは人間を軽蔑すべき自然へと同化し貶めるような態度はカントにとって身の毛もよだつことであつたからである（ギリシア悲劇の根本的モチーフも、人間が知らず知らずのうちに自然的・動物的になつてしまつたことを嘆くことになつている）。カントの『判断力批判』の着想は、『純粹理性批判』と『実践理性批判』とを書いた後に、まだ解決しなければならぬ事柄として「自然目的」（自然には目的があるということ）があることに気づいてからのことであろう。理念は近代的枠組みを脅かすものである。なぜならば、認識論的あり方を基盤とする近代においては、認識され得ないもの（カント的に言うならば感性に受容されてはいないもの）は、原理的には排除されるべきであるからである。特に、人間的なものとしての靈魂と人間が範とする神とは、世界（自然）と比べるならばまだ組みし

易いものであった。しかし自然は、古代ギリシア以降は問題圏（プロブレマティーク）から外されてしまっており、理念としての自然へのアプローチは極めて困難なことである。

自然を人間より低く位置づけることは、ユダヤ・キリスト教を淵源にして近代まで流れ込んできている。この自然観が厄介であるのは、それが自然科学を、そしてその応用としての科学技術を生み、それが人間に圧倒的に説得力のある福音をもたらしたからである。ユダヤ・キリスト教の自然観は、自然の上に神が存在し神が自然を創造したというものである。ルネッサンスを経て神は前景から後退した。しかし神に代わって登場したのは、人間であり、自然は以前にもまして人間とって「征服されるべきもの」となってしまった。それは人間の内なる自然に対しても同じことである。自然的存在である「感性」は、「悟性」よりも「理性」よりも低いものとみなされた。

カントの生きていた時代の趨勢も上で述べたような状況であった。人間の機能のうちで、感性を自然に、悟性を人間にそして理性を神に割り当てることは普通に行われていることであった。

カントの『判断力批判』は、このような通念としての分類を壊そうとする試みと受け取ることができる。つまり自然を切り捨てるのではなく、自然の低い位置づけを修正し、自然を人間と同等の位置において人間と調和させようとするものである。そのときカントの中で、『純粹理性批判』、『実践理性批判』の基底にあった構えが崩壊する。つまり、カントはこの基底の構えに反するあり得ない事柄を語りだすのである。

自然はそのままわれわれ人間には与えられるわけではない。自然は人間的洗礼を受けて、その後人間の中で再構成される。これが近代の認識論的な自然観である。認識論が真理の基準となったのは、認識者（人間）が中心

的主役になったからである。しかし、認識者だけでは認識は成立しない。被認識物も必要なのである。デカルトが思惟実体としての人間と延長実体としての物体の二つが真理を支えるものであるとしたのは、やはりこの認識論的発想があったからである。

『判断力批判』の§77は「自然目的という概念をわれわれに可能にさせている人間悟性の特徴について」という表題をもっている。つまりカントは自然に目的があると考えた場合に、われわれ人間の悟性をどのように考えればよいのかを論ずるのである。自然は目的をもたず、ただ原因から必然的に結果を生み出す機械のようなものと考えれば、人間悟性は原因と結果との関係づけを行えばよいだけである。つまり、感性に与えられた多様を「関係の」カテゴリーによって結びつけることが悟性の機能なのである。しかし、自然を単なる機械と考えるので、自然も目的をもって存在しているものと考えるならば、当然人間悟性のあり方を変更しなければならなくなる。

「…そこで自然の原因性の概念が、目的に従ってはたらく存在者の概念とみなされて、あたかも自然目的の理念を構成的原理たらしめるかのような観を呈するものである。しかしこの場合に自然目的の理念は、他の一切の理念から区別されるような何かあるものをもっているはずである。

しかしこの区別されるものが存立するのは、自然目的の理念が悟性に対する理性原理ではなくて、判断力に対する理性原理である、というところにある。」
(カント『判断力批判』§77)

自然の因果関係は原因が結果を生み出すだけであるが、自然の目的論(自然目的)は原因がすでに目的に従属

しており、したがって目的が原因をそして結果を生み出すことになる。すると目的が原因を構成し（原因の要素となり）、自然目的が認識の構成要素になってしまうことになる。しかし、理念としての自然目的は、カントの認識論的構えからして、認識の構成要素にはなり得ない。理念はもともと規定的ではなく統整的にしか使用され得ないからである。つまり理性は認識するという場面には参画せず、認識作用の結果として獲得された認識物（認識されたもの・表象）がいかなる意味をもつのか、つまり獲得された認識物を解釈するときに意味をもつのである。とくに自然目的という理念は、われわれが生き物を観察しているときに、それがただ単に因果的に（機械的に）存在するのではなく、その生き物が或る目的をもつて生きていると考えるのは、あるいは考えてしまうのはある意味当然のことでもあるであろう。『ファーブル昆虫記』も『シートン動物記』も、その生物観察においていかになく当該の生物の生きる目的を描写しているから面白いのである。カントも有機体の観察において、単なる機械論的説明では十分でないことを了解していたのであろう。

カントは人間の心的機能に関して認識に参画しないけれども結果的に（間接的に）認識を可能にする機能のあることを認める。構成的（konstruktiv）に対して統整的（regulativ）、あるいは規定的（bestimmend）に対して反省的（reflektierend）という言い方がなされるのである。感性和悟性という全く性質の違う機能を結びつけるために、カントは「構想力」（Einbildungskraft）を創出した。これは感性的でもあるしまた悟性的でもある。つまりまったく性質の違う二つのものを結びつけるためには媒介が必要であり、この媒介は結びつけられる二つの性質を同時にもっていないなければならないのである。そしてこの構想力は感性、悟性につづく第三の認識能力として認められるのである。カントは必要な結果として認めなければならない能力を「力」と命名する。判断力も悟性と理性の中間に位置して両者を結びつける機能をもつ。通常理性概念としての理念は悟性に対して超越的に

関係する。つまり悟性は理念に対して自ら関係をもつことはできず、ただ統整的にのみ理念を使用することができ。しかし自然目的という理念は、悟性に対して関係をもたず、媒介者である判断力に対して関係をもつ。したがって、自然目的という理念は、悟性化もされずまた悟性に対して超越的にとどまる必要もないままに判断力と関係するのである。さらに判断力を構想力から類推すると、構想力 (Einbildungskraft) が形象 (Bild) という感性的なものをもちながら悟性的であらんとするように、判断力は判断作用という悟性のあり方を担いながらなお理性的であろうとするものである。

神、靈魂そして世界 (自然) という理念の内、神という理念は近代においてその非合理性ゆえに歴史の前景から退場した。また靈魂も、人間を靈魂と捉えることがそもそも神との関係において出された人間規定であったので、これも退場させられた。一方自然という理念は近代になるとますます重要なものとなった。『純粹理性批判』は、認識論を論じたものとも言えるが、超越論的感性論と超越論的分析論とを自然科学の基礎づけを行ったとも言っているのであり、それほど自然がカントにとって関心の高いものであった。自然は人間にとって「より近い」理念として存在していたことになる。したがって自然目的という理念を、単なる超越的な理念であることから救出しなければならぬとカントが考えたことは当然であろう。

「∴自然の事物を反省する場合の判断力に関しては、われわれ (人間) の悟性のひとつの特徴が開示されることになる。しかしそうだとするとわれわれの悟性の根底には、人間悟性とは異なる可能的悟性の理念が存在しなければならぬ (このような事情は、『純粹理性批判』においてわれわれの直観とは異なる可能的直観を考えねばならぬ) かつたのとまったく同様である。われわれの直観は或る特殊な種類の直観であって、かか

る直観に対しては、対象は単なる現象とみなされねばならないからである。したがって次のように言ってもよいであろう。すなわち、或る種の自然所産はわれわれの悟性の特別な性質にしがたつて、その可能性の上からは、意図的にまた目的としてわれわれによつて産出されたのだと考察されなければならない、と。」

(カント『判断力批判』§77)

「もしわれわれが、われわれの論証的悟性におけるように、全体の可能は部分に依存するというふうを考えないで、直観的(原型的)悟性に準拠して、部分(その性質と結合とに関して)の可能が全体に依存するというふうを考えようとするならば、このことはいま述べたわれわれの悟性の特性に従うのでは不可能なのである。∴直観的悟性においては全体の表象が、全体の形式とこの全体に属する部分の結合とを可能ならしめる根拠を含むのである。そうすればかかる全体が結果(所産)ということになるだろう、そして全体の表象がこの全体を可能ならしめる原因とみなされるわけである。」

(カント『判断力批判』§77)

「∴物質的な全体をその形式に関して、この全体を成すところの部分とこれらの部分が互いに結びつく(さらにまたこれらの部分が、他の物質にも加えるところの)力および能力とから生じた所産として考察する場合には、われわれはかかる全体を産出する機械的な仕方を思い浮かべることになる。しかしこういう仕方では、目的としての全体の概念は生じてくるものではない。このような全体の内的可能は、必ずや全体の理念を前提する、そしてこれらの部分のそれぞれの性質や作用の仕方すら、かかる理念に依存しているのである。われわれが有機的物体と考えざるを得ないのは実にこのようなものである。」

ここでカントは今まで墨守してきた認識論的制約を破ろうとする。つまり、この文で語られている「可能的悟性」・「直観的（原型的）悟性」とは、「可能的（知的）直観」と同じように、われわれ人間がもち得ない能力なのである。つまり感性的素材を必要としない悟性であり、そのかぎり理性と同義の悟性である。感性を必要としない悟性、しかも理性の制約も受けない悟性、それは「神的悟性」としての「可能的悟性」であるであらう。

もともと判断力をどう理解するべきなのかはなかなか難しい問題である。判断力はその名前からしても分かるように悟性由来の能力である。しかし、悟性そのものではなく、悟性の出先機関でありながら、悟性のように感性（現象）に拘束されてはいない。すでに述べたように、神、霊魂そして世界（自然）という理念は、部分にかかわれない悟性に一気に全体のイメージを与えて部分に明確な位置づけを行う。このことをカントは理性の統整的使用と呼び、悟性への理性の間接的な関与であるとして理性の意義を語った。一気に全体のイメージをもつことは理性に与えられた特権である。そしてそれゆえに理性は悟性に対して圧倒的に超越していたのである。一方、自然目的という理念は判断力に関わることによつて出先機関としての悟性に変容を強いるのである。自然を目的にとらえるためには、従来の悟性ではいかんともしがたく、したがつて悟性を「可能的悟性」（つまり神的悟性）へと変容させなければならないのである。つまり、人間悟性の制約（感性へと結びつかなくてはならないという）が、理念の超越性を生み出すのであるが、自然目的という理念は、判断力に結びつくことによつて悟性に変容を迫るのである。

近代からの離反

カントが自然目的（自然を目的論的にとらえる）という案件に直面したとき、カントはなんとしてもこの理念

を救出しなければならぬと考えた。この自然目的という理念は、感性的自然と両立しようとカントは考え、そしてさらにこの両者は融合するとすら考えている（『判断力批判』§78）。自然は、感性的に与えられたもののみが自然ではなく、むしろ理念としての自然、全体としての自然、「能産的自然」さらには「物自体としての自然」といったものがあり、これは古代ギリシアのフュシスとしての自然と同じものであろう。もちろんこのような「根源的自然」をそのまま肯定することは、實在論のそしりを免れないことであらう。しかしカントは「自然」を近代的自然観に限定しそこに閉じ込めておくことはできなかった。

「物質界を単なる現象とみなし、また物自体としての何か或るもの（これは現象ではない）を基体と考え、さらにまたこの基体に対応する知性的直観（これはわれわれ人間の直観ではないが）を擬することは、少なくとも可能である。そうすれば自然に対する超感性的な実在的根拠（われわれには認識され得ないにせよ）が想定されることになるだろう、そしてわれわれ自身もまたこの自然に属しているのである。」

（カント『判断力批判』§77）

『判断力批判』においてはいろいろな事柄が語られているだろうが、やはりそのエッセンスは人間を超えた自然をなんとか基礎づけようとするカントの意欲である。啓蒙思想の末期に位置するカントが、イギリス人でもフランス人でもないカントが、後にロマン主義がおこってくるドイツの風景の中で、根源的自然（目的論的自然）を意識して、自らの批判主義の根幹を揺るがすような思想を展開したことはまことに興味深いことである。

「実際いかなる人間理性も（また質の点ではわれわれの理性に類似しているにせよ、しかし程度の上では著しく立ちまざっているいかなる有限的理性といえども）、一茎草の産出をすら単なる機械的原因によって理解することを望み得ないのである。」

（カント『判断力批判』§77）

もちろんカントは、實在論を推し進めようとするのではない。つまり自然そのものを絶対視して、人間をそのような自然に従属させようとするのではない。そうではなくて、根源的自然を把握できるような体制を、われわれ人間の内に見いだそうとする。そしてそのときわれわれの認識論的あり方は、たとえ批判哲学的に「超越論的」ということをもって認識論に変容を与えようとしたところで、この根源的自然を前にして崩壊する。

「自然の目的による結合の根拠を、自然そのものから得てくることは、われわれには絶対に不可能である、そこで人間の認識能力の性質にかんがみて、かかる結合の最高根拠を世界原因としての根源的悟性に求めることが、われわれにとって必然的になるのである。」

（カント『判断力批判』§77）

カントは水と油の関係であった大陸合理論とイギリス経験論とを調停する形で、自らの批判哲学を『純粹理性批判』として提示した。経験が先か経験以前の人間の体制（表象）が先かという争いの前提として、「超越論的な次元」があるとカントは考えた。つまり人間にとって可能な立場は経験において他にはない、しかし経験はただ感覚的に把握することに限定されるものではなく、その経験を可能にする体制としての人間の内なる体制を問題にしなければならない、と。カントの立場は、心が先（唯心論）という立場と物が先（唯物論）という次元

以前に、心も物も「いかにして与えられるのか」という次元を問題にした。そしてこの「与えられる」（認識）立場を基盤にして、さらにその上に人間自らが「与える」、自らが原因となる次元としての行為の立場をカントは示した。それが『実践理性批判』である。しかしカントは、これら『純粹理性批判』と『実践理性批判』の立場に満足することなく、さらに上の立場もしくは別の立場を模索しようとした。それが『判断力批判』である。自然を目的をもつものとして考えようとすることは、自然は感性に与えられるのと同時に、理念としてわれわれの認識を超えるものでもあるとしなければならない。このウルトラCをカントは判断力をもってまた今までの悟性概念の変更をもって示そうとした。その「告白」が『判断力批判』の§77である。

〈キーワード〉

カント 判断力批判 自然 近代